

〈高校英語〉

英語による実践的コミュニケーション能力を高める指導の工夫

— 体験・活用・参加型のタスク活動を取り入れて —

上江洲 隆 * 平 良 学 ** 島 田 純 ***

I テーマ設定の理由

自然破壊や地球温暖化に伴う環境問題や人口増加に伴う食糧やエネルギー問題、さらには民族や宗教間紛争等の地球規模で解決が求められている諸問題が山積している今日、国際社会における国家・地域間の対話の大切さが強く求められている。また、通信機器やコンピュータ、交通機関等の発達により、日常生活の中で必然的に母国語の異なる者同士による個人間の会話の機会も急速に増えつつある。このような社会情勢の中、我が国が世界の平和維持等に貢献するため、また、その反面、国際社会において不利益を被らないため、国際的共通言語としての英語の役割が益々増加してきている。このことから、学校現場における英語の授業では、実際に英語を使う機会の充実をととして生徒のコミュニケーション能力の向上を図ることが肝要だと考える。

文部科学省は、平成15年3月に「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を策定し、その中で「英語の授業においては、文法訳読中心の指導や教員の一方的な授業ではなく、英語をコミュニケーションの手段として使用する活動を積み重ね、これを通して、語彙や文法などの習熟を図り、『聞く』『話す』『読む』『書く』のコミュニケーション能力の育成を図っていく指導の工夫が必要である。」と英語の授業改善に向けての示唆を与えている。

しかし、国立教育政策研究所 高等学校教育過程実施状況調査 英語 I（平成17年11月実施、平成19年4月発表）によると「聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりするコミュニケーション活動を行っていますか。」という質問に対して「多くの時間で行っている」「どちらかといえば行っている方が多い」と回答した教師はわずか16.7%にとどまっている。このことから学習指導要領 外国語編における目標でも述べられている「情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。」ことを実現するための手だてを講じる必要がある。

以上のことから、主に「聞く」「話す」「読む」「書く」の各領域を有機的に結びつけるタスク活動やタスク活動を行う際の効果的なペアワークやグループワークの活用の工夫に視点をおきながら、生徒相互における双方向的言語使用を伴う体験・活用・参加型のタスク活動をととして生徒の英語における実践的コミュニケーション能力の育成を図ろうと考え、本テーマを設定した。特に、本稿ではスキットとディベートをととした実践事例を紹介する。

〈研究仮説〉

英語 II あるいは時事英語の授業において、体験・活用・参加型のタスク活動を取り入れることによって、生徒の英語による実践的コミュニケーション能力が育成されるであろう。

II 研究内容

1 英語による実践的コミュニケーション能力について

(1) 英語による実践的コミュニケーション能力とは

英語による「実践的コミュニケーション」について次のような定義がなされている。『『実践的コミュニケーション』とは、単に外国語の文法規則や語彙などについての知識をもっているというだけではなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力のことである。』（平成10年告示学習指導要領『解説』）。換言すれば、コミュニケーションの手段として、現実の場面で英語を適切に使うことができる総合的な力と言い換えることができる。

カナルとスウェイン (Canale and Swain 1980) は、下記のとおり4領域からなるコミュニケーション能力モデルを提唱した。(表1) このことから、コミュニケーション能力とは、単に言語に対する知識だけではなく、様々な技能的な要素も含む複合的なものであることがわかる。

表1 コミュニケーション能力 (Communicative Competence) を構成する4領域

① 文法能力 (Grammatical Competence) : 語句・構文・文法・発音等についての知識
② 社会言語能力 (Sociolinguistic Competence) : 対人関係に必要な言語能力
③ 談話能力 (Discourse Competence) : 文脈や場面、話題の流れを読む力
④ 方略的能力 (Strategic Competence) あらゆる言語、あるいは非言語的手段を用いてコミュニケーションを行うことのできる力 例: 「言い換え (paraphrase)」「繰り返し (repetition)」「確認 (clarification)」「身振り (gesture)」「感情移入 (empathy)」等

以上の4領域を有機的に関連させた指導を工夫することにより、生徒の「実践的コミュニケーション能力」育成につながるものと考ええる。

(2) 英語による実践的コミュニケーション能力を高めることの意義

文部科学省教育課程審議会答申 (1998) では、「自分の考えや意志を適切に表現できる基礎的・実践的コミュニケーション能力の育成を目指すこと」をねらいとし、「外国語教育については、国際社会の中で日本人としての自覚を持ち主体的に生きていく上で必要な資質や能力を育成することが極めて重要である」としている。すなわち、これからの国際社会をたくましく生き抜く力を育成することを目的とする外国語科の指導は、「言語知識の詰め込みではなく、生徒の学ぶ力と意欲を大切に、しかも実社会との結びつきを重視した学習や体験を与えることによって、文化や言語の異なる人達とも情報や自分の考えを積極的に伝え合うことができる『実践的コミュニケーション能力』の育成」を重視しなければならないと考える。

「実践的コミュニケーション能力」を高めることにより、生徒は、世界中から発信される様々な情報やこれまでに知ることのなかった異文化に直にふれ、多様な価値観を理解することができるものと思われる。さらに、文化や言語の異なる人達との情報交換をとおして、自分の視野を広げると共に、我が国や自分が住んでいる地域の伝統・文化を再認識し、アイデンティティーの確立にもつながるものと考ええる。

(3) 英語による実践的コミュニケーション能力を高めるために

文法訳読式による教師中心の一方向的な授業では、語彙や文法、構文といった所謂「英語についての知識」は習得できるが、いかに英語を使用するかといった「英語の運用についての知識 (技能)」は、身に付くことは困難である。青谷正妥 (2005) は、このことを「顕在的知識 (Explicit Knowledge)」と「潜在的知識 (Implicit Knowledge)」という二つのことばで説明している。顕在的知識とは、「自分でどういうものかはっきりと説明できる知識」のことで、英語学習では、文法的な要素を表す。これに対して、潜在的知識は、「できるけれども言葉で説明できない知識 (知識というよりむしろ技能のこと)」のことである。英語のネイティブスピーカーが、英語の文法について説明することができなくても、ほとんど正確かつ流暢に話すことができるのは、その言語の顕在的知識はなくても潜在的知識に優れているからである。その反面、日本人が、長年英語を学習しても実際の会話を要する場面において英語を話すことができないといわれ続けてきたのは潜在的知識の不足にあると考える。われわれ外国語学習者が、英語を学ぶ場合、これら双方の知識のバランスに配慮することが大切であり、そのことが実際にコミュニケーションを目的として英語を運用する能力すなわち実践的コミュニケーションの育成につながるものであると思われる。

2 体験・活用・参加型のタスク活動について

(1) タスク活動とは

白畑友彦 (2003) は、外国語教育におけるタスクについて「言語習得を目的として行う課題や作業をタスクと呼ぶ。特に、学習者に目標言語でコミュニケーション活動を行わせるための課題をタスクと呼ぶことが多い」と定義している。また、効果的なタスクについて以下

の4点を挙げている。(表2)

表2 効果的なタスクの特徴(白畑友彦 2003)

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① タスクの到達点(goal)が明確である。② タスク完了のために情報交換を必要とする。③ 実際のコミュニケーションと同じ作業、または類似した作業である。④ 内容が現実の社会活動と深く関わっていて、学習者の興味・関心、および知的レベルに
あっている。 |
|--|

このように、効果的なタスクを取り入れた活動を行うことにより、学習者同士のコミュニケーションにおける相互交流が生まれ、それに伴う意味交渉をとおして学習者の言語習得が促進されるものとする。

(2) 体験型学習 — 言語体験について

表1に示したとおり、英語による実践的コミュニケーションには、文法能力、社会言語能力、談話能力、方略的能力の4つの構成要素があると考えられている。文法能力がいかに優れていても、他の3つの要素が大きく欠けていると意志や情報の伝達に必要な真の英語力には結びつかない。また、長瀬荘一(1996)は、英語のコミュニケーション能力を育てるために、「①基本的な語句、文型を身につけさせること ②英語をシャワーのようにたくさん浴びさせること ③英語を使う体験を豊富に持たせること」の3点が必要であると述べ、言語体験指導の意義を以下のように示している。(表3)

表3 言語体験指導の意義(長瀬荘一 1996)

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 言語体験によって、真の「わかること」を獲得する。
英語学習において「わかったつもり」が「わかった」に転化するためには、生徒の自主的、能動的な言語体験が必要となる。なぜなら、生徒の中に生じた「わかったつもり」は、行動化され言語化されて、はじめて「わかった」に生まれ変わるからである。② 自主的言語体験(英語学習において生徒が自主的、能動的に英語を使いながら学んでいく活動)は「効力感」を生み、「やる気」を喚起する。
稲垣佳世子氏(1985)の言う「効力感」すなわち、「努力すれば、あるいは行動すれば、環境に好ましい変化をもたらすことができるという見通しとそれにともなう感情(自信)」を生みだし、生徒の「やる気」を喚起する。③ 自主的言語体験は「コミュニケーション能力」を育てる。
自主的言語体験には、生徒が学んだことをもとにして自分で英語を使う体験を豊かにする側面があるため、「コミュニケーション能力」育成に重要な役割を果たすことになる。④ 自主的言語体験は「自学能力」を育てる。
自主的言語体験をとおして「繰り返して練習する技能」「調べる技能」「関係づける技能」などの「個人的な学習技能」と、「聞き方・話し方の技能」「協力して練習する技能」など「集団的な学習技能」が養われる。⑤ 自主的言語体験は「国際理解能力」を育てる。
コミュニケーション活動において、話題や題材をとおして必然的に他の文化や他の人との関わりを生じ、それによって他の文化や他の人を理解しようとする心を養う。 |
|---|

(3) 活用型学習について

知識基盤型社会と呼ばれる今日、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を基盤とした確かな学力の育成が求められている。2008年1月17日付けの中教審答申によると、活用型とは、基礎的な知識や概念を活用することを意味しており、「それぞれの教科の知識・技能を活用する学習活動を充実させることを重視する必要がある」と記されている。

換言すると、知識の詰め込みによる「知識偏重型学習」から脱却し、習得した知識や技能を普段の生活の中で活かすことのできる確かな学力を育むための「活用型学習」を普段の授業のなかに取り入れていくことが大切であるとする。活用型学習では、図1にみられるように、習得した基礎的・基本的な知識・技能と既習事項・既有経験、および思考力・判断力・表現力を活用しながらタスクを解決することにより、確かな学力の育成につながるものと

考える。その際には、それぞれ個別の知識であった既習事項とその場で習得した事項とが思考力・判断力・表現力により統合され、より大きな知識形態ができあがるものと考えられる。さらに、そこで身に付いた基礎的・基本的な知識・技能に対して「活用」と「フィードバック」をスパイラルに繰り返すことにより、演繹・帰納双方の論理的思考力が培われ、その定着につながっていくものとする。

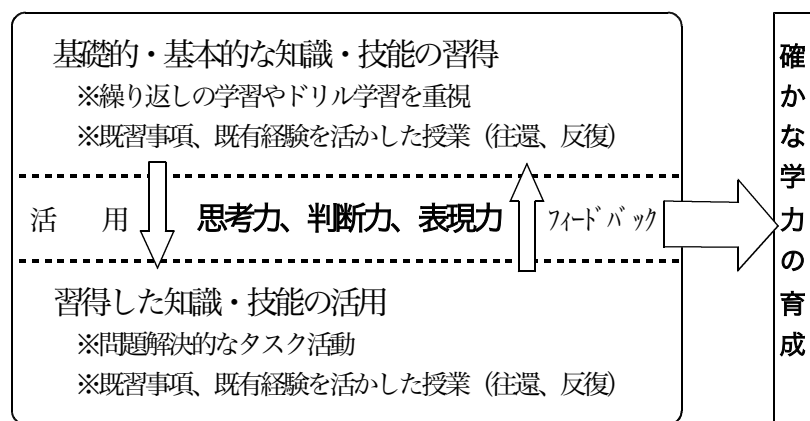


図1 習得・活用を充実・深化する授業モデル

(4) 参加型学習について

大和隆介（2004）は、授業の手法と指導内容の定着度について、図2のように「学習ピラミッド」と呼ばれるデータを示し、「新しい知識や技能を習得するためには、ただ『聞く』だけではなく、自分の目で見、自分の頭で考え、実際に行動し、教えあうことが大切である」と述べている。

また、「知識中心の講義型の学習や、教えるものと教えられるものとの関係を固定化した一方通行の学習に対して、教えるものと教えられるものとの関係が固定化されず、参加者の相互作用による理解が図られる」と、開発教育協会（2008）は、その学び方重視の参加型学習の有用性にふれている。また、その手法として発表・対話・実験・

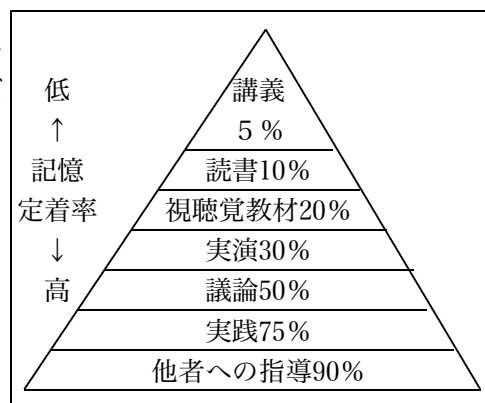


図2 学習ピラミッド（大和隆介 2004）

見学・調査・スタディツアー・ワークキャンプ、ディベート、ランキング、フォトランゲージ、シミュレーション、ロールプレイ、プランニングがあり、「学習者が、単に受け手や聞き手としてではなく、その学習過程に自主的に協力的に参加することをめざす学習方法」と捉えている。そして、いずれの手法にも共通する基本的な特徴として、「①学習者の緊張を解き、その場の雰囲気や和ませる中で、学習者が持っている知識や経験、個性や能力を引き出し、相互の意見交流や相互理解を促進すること ②その過程で学習者が新しい発見をしていくこと」を重視していることを指摘している。

参加型学習では、教師のことを「ファシリテーター（促進者）」と呼び、「生徒ひとりひとりがもっている経験・知識・意見などを引き出し、対話を生み出し、相互の学び合いを促進する役割である」としている。教師は、生徒に「自分と現実世界との関わりに気づく中で、自分がその世界に主体的に関われる楽しさ、またその世界の変革や創造に参加できる楽しさ」（開発教育協会）を実感させるため、学びを現実感あるもの、未来につながるものにしていくことが大切である。

(5) 体験・活用・参加型のタスク活動を用いることの意義

体験・活用・参加型の学習について、それぞれ述べてきたが、図3に示すとおり、これらは切り離して捉えるよりも各活動を交互に用いたり、統合的に学習に取り入れたときに、生徒の学習意欲をひきだす動機付けとなり、言語習得のより大きな効果が期待できる。このことは、中央教育審議会答申（2008）において記されている「思考力・判断力・表現力の育成のために不可欠な学習活動」からも読み取ることができる。（表4）同答申の①が体験型、③が活用型、⑥が参加型学習のそれぞれの特徴を表しており、これらの要素を含むタスク活動を用い、計画的、且つ継続的に授業を組み立てることに

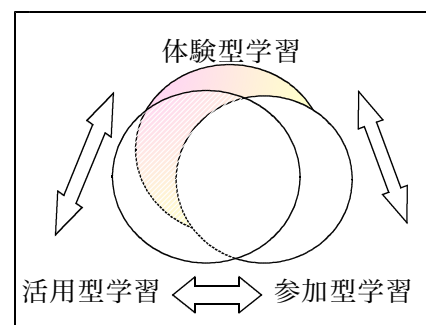


図3 体験・活用・参加型の学習の関連イメージ

より、学習者の思考力・判断力・表現力が育成され则认为。また、体験・活用・参加型のタスク活動をととして、個々の既習の知識と習得した知識が融合され、大きな組織的知識体系が確立され则认为。さらに、語学学習の面においても、個々の語彙や文法事項等に係る文法能力が、上記のタスク活動をととして社会言語能力や談話能力、方略的能力等と結びつき、実践的コミュニケーション能力が育成されるであろうと考える。

表4 思考力・判断力・表現力を育むために必要な学習活動（中教審答申 2008.1.17より抜粋）

- | |
|---|
| ① 体験から感じ取ったことを表現する
② 事実を正確に理解し伝達する
③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
④ 情報を分析・評価し、論述する
⑤ 課題について考え、構想を立て実践し、評価・改善する
⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる |
|---|

3 授業の工夫

(1) スキットをいかに授業にとりいれるか

高等学校学習指導要領解説（1999）によると「『スキットなど』とは、モデルとなる会話をもとに筋や役割を工夫して演技することや、簡単な台本をもとにした寸劇、与えられた役割に即し、場面や目的に応じて自分の英語で発話するロール・プレイ、与えられた状況で自由に演技する即興劇、舞台などで演じる戯曲などを意味する。」とある。

本研究では、生徒が、授業で学習した言語材料の「命令文」を用いて、話の展開、登場人物、それぞれの人間関係、場面などにポイントをおいて、オリジナルの台本を制作した。スキットの台本作成、及び演技発表については、「意見をまとめやすい」という点と「全員が演技に参加する機会をあたえやすい」という視点から3名1グループの活動とした。

スキットの演技のために必要な要素を表5にまとめる。

表5 スキット演技のために必要な要素

- | |
|---|
| ① スキットなどの内容を十分に理解し、全体の流れ、登場人物の心の動きなどを的確につかむ。
② どのような英語表現を使い、どのような非言語的手段を使えば、それらを効果的に表現できるかを工夫する。
③ スキットなどを見ている生徒たちも、物語の流れ、登場人物の心の動きなどを的確につかむ。 |
|---|

また、他のグループのスキットを評価することにより、クラス全員が授業へ参加しているという意識と、英語を聞こうとする集中力が高まるものとする。しかし、生徒の実態に応じて、評価項目等を工夫することも大切である。本研究においては、表6のように「内容、演技、英語力」の3つの視点からお互い同士の評価を求めた。さらに、授業の最後には、スキット全体のフィードバックとして、ALTにグループ毎の演技に対するコメントを述べてもらい、スキット活動が今後の学習指導に生かせるよう工夫を施した。

表6 Judging Sheet

Judging Criteria			A	B	C	D	E
1	Content (5)	Creativity of scene	5	4	3	2	1
2	Performance/Delivery (10)	1.Audience appeal 2.Overall quality of performance 3. Memorization	10	8	6	4	2
3	English(5)	intonation, pause	5	4	3	2	1

(2) ディベートをいかに授業にとりいれるか

高等学校学習指導要領解説（1999）では、「ディベートは、与えられた論題をもとに肯定側と否定側に分かれ、一定の規則、進行の仕方、制限時間などに従って、自分たちの立場の正当性を聞き手に受け入れてもらうことを目的として議論する対立型コミュニケーションの形

態である。」と定義されている。以下に、同指導要領解説を参考にディベートを行う際の注意点についてまとめる。(表7)

表7 ディベートを行う際の注意点(高等学校学習指導要領解説 1999を参考に作成)

- ① 準備段階やディベートの実施段階にあつては、4領域を有機的に関連付けた学習を行うよう配慮すること。
- ② 生徒が論題について主体的に考えた上で活発にディベートができるようにするため、生徒の興味・関心や英語の理解力及び表現力などを考慮して論題を設定し、事前の指導を行い、生徒に十分な準備をさせること。
- ③ 話し手の議論のポイントや展開を注意深く聞きながら理解し、その反論を考えて発表するといったように、相手の論点に直接対応すること。
- ④ 選ばれた数名が、時には聴衆全員がジャッジになり、一定のルールと方法によって、それぞれの主張を評価し、肯定側と否定側のどちらが論理的により説得力があったかを判定すること。その際、なるべく多くの聴衆をジャッジとすることで、全員参加型の学習とすることができる。
- ⑤ ディベートの優劣の判定に当たっては、感情的にどちらの側へ賛成するかではなく、提示された議論の適切さと一貫性を判定するよう求め、判定の方法についての指導も行うこと。

上記の①、②及び③について、本研究では、“Guess Game”や“One Minute Chat”“Chain Talk”等の4領域を有機的に関連づけた事前活動を取り入れることにより、相手の言っていることを積極的に理解しようとする姿勢や自分の言いたいことを論理的に伝えようとする態度、及びディベートに必要な表現等を身につけさせることにより、生徒のディベートに対する興味・関心を喚起した。また、あまりディベートになれていない生徒達の準備にかかる負担を軽減するため、「お正月はクリスマスよりも素晴らしい」という生徒にとって身近な論題を設定することにより、活発にディベートができるような態勢作りを図った。以下に“Guess Game”“One Minute Chat”“Chain Talk”についての説明を付す。

① Guess Gameとは

ア まず始めに、2名1組のペアを作る。

イ お互い同士向かい合わせ、一方は黒板が見える位置、他方は見えない位置に立たせる。

ウ 教師が黒板にある一つの英単語を書く。

エ 黒板の見える側に立っている生徒は、その単語を確認し自分のペアに対し、その単語についての説明を英語で行う。(但し、説明の中で、その単語自体を用いることはできない)

オ 説明を受けた側の生徒は、それをもとに推測し、黒板に書かれている単語を一定の時間内にあてる。

② One Minute Talkとは(別添資料6参照)

ア まず始めに、2名1組のペアを作る。

イ 発話例をもとに、「プラス1文」「関連した質問」「相づち」「会話がとぎれたときの質問」を付け加えながら、1分間、会話を繋げていく。

ウ うまくできたかどうかを自己評価表に記入する。

③ Chian Talkとは(別添資料7)

ア まず始めに、3名1組のグループを作る。

イ 最初の発言者が、「自分はEメールを送るよりも電話をするほうが好きだ」あるいは、「自分は電話をするよりもEメールを送るほうが好きだ」という意見を述べる。

ウ 他のメンバーは、「〇〇さんは、△△ということを言っている。私も同じ意見です。(私は意見が違います)私は◇◇することが好きです。」というように、最初の発言者の意見と比較しながら、自分の意見を明確に伝える。

エ Stage 2では、最初の発言者の意見と比較しながら、自分の意見を明確に伝えた

後、「どうして意見が同じなのか（違うのか）」について理由を述べる。

本研究で行ったディベートは3名一組のミニ・ディベートであり、図4のような流れで行った。特に、賛成派、反対派それぞれの3名のグループメンバー全員が、ディベートに参加できるよう、立論から質疑応答にわたり第1スピーカーから第3スピーカーを設定した。さらに、作戦タイムを設け、相手を論破するため、それぞれのチームワークを発揮する場面も設けた。

今回は、クラスサイズが小さかったため、全体を9名ずつに分け、2つのグループがディベートを行っている際は、他の1グループが司会、並びに審査を行った。そして、ディベートに勝ったチームは、次に司会・審査だったチームとの対戦を行い、負けたチームが司会・審査へとまわる勝ち残り方式を採用した。

表7④⑤の評価については、別添資料8、9にあるとおり自己と他者の両方について評価できるようにし、常に全員が授業へ参加できるよう工夫を図った。

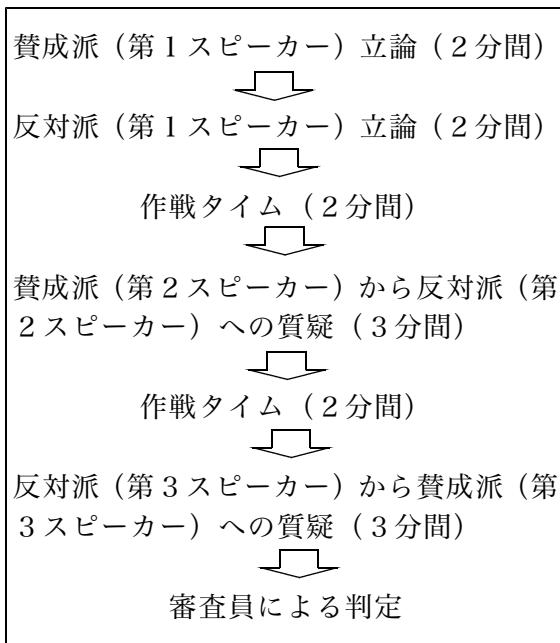


図4 ミニ・ディベートの流れ

III 指導の実際

実践事例1 高等学校の実践より 沖縄県立西原高等学校教諭 島田 純

1 単元名：Reading 13 Cashier Defeats Gunman

ORBIT English Reading New Edition (SANSEIDO)

2 単元設定の理由

(1) 教材観：比較的平易な文章で書かれた文章であるが、命令文を使ったレジ係と武装犯人のやりとりから、その場の雰囲気やストーリー展開（おち）を理解しなければならない。文の前後関係から意味を推測することが難しい生徒がでてくると予想される、単語や表現の定着を図り、適宜場面の説明を加えなければならないと考える。

(2) 生徒観：検証授業を実施した8組は文理進学コースであり、習熟度で成績が上の方のクラスである。英語に対して、興味関心が高く、授業に向かう姿勢も積極的である。しかし、基礎的な英語の力の定着がなされていない生徒もあり、英語の実力差が伺えるのが現状である。

本年度の3学年は、2年次より習熟度による授業展開を行っており、その中で、Aクラスは大学受験を希望している生徒が多い。しかし、一般入試で大学を受験する生徒は少数で、9割以上が推薦入試制度を利用した進学を考えている。そのため、受験に対する学習意識は低い。

(3) 指導観：教育課程において、3年次に「リーディング」4単位を設置しており、英語の学習指導は基本的に選択科目履修者を除けば、この4単位内で行っている。本教材では、速読を意識した授業展開を行い、大意をとる練習を繰り返してきたが、文法訳読式の授業でフォローを入れなければならないのが現状である。

本課のまとめとして、実践的コミュニケーション能力の育成の観点より、リーディングの授業内で4技能を効果的に身につけ自発的な活動として、どのようなTaskが課せられるのかを考えたとき、評価の観点の『命令文が、どのような場面でどのように使われているのか理解でき、適切な場面で使う事ができる。又、物語文で、どのようにしたら「おち」を効果的に伝えることができるのか理解できる。』ということから、命令文を使用した短いスキットを作成させることで、4技能を効果的に使用しながら、実践的コミュニケーション能力の育成が図れるのではないかと考えた。検証授業クラス8組はオーラルコミュニケーション（2単

位)も必修としているため、今回、英語を発話することに関しての動機付けはされているものとするが、実際のところ、ほとんどの生徒が英語で発話することに関しては消極的な生徒達である。よって、動機付けと環境作りが必要である。

3 単元の学習目標

- (1) 難解な表現があっても、挿し絵や文の前後関係から意味を推測し、内容を理解する。
- (2) 命令文が、どのような場面でどのように使われているのか理解でき、適切な場面で使うことができる。
- (3) 物語文を読み、そこに埋め込まれた伏線と「おち」との関係に注意しながら読むことができる。
- (4) 物語文の構成を理解し、あらすじをとらえてそれを日本語で説明することができる。
- (5) 場面を構成し、簡単な英語でスキットを作成し、発表することができる。

4 単元の具体的な評価基準

関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての知識・理解
① 物語文に興味・関心を持って読もうとしている。 ② 物語のユーモアを理解し、楽しんで読もうとしている。 ③ 難解な表現があっても、挿し絵や文の前後関係から意味を推測しようとして努力している。 ④ 与えられた課題を組み込んだスキットを楽しく表現し、発表している。	－話すこと－ ① 物語文を聞いて、そのあらすじを簡単に伝えることができる。 ② 物語文の内容を尋ねる質問を英語で作成し、またそれに英語で応答することができる。 ③ 命令文を聞き、その用件の緊急性を理解することができる。 ④ 自分の意見や考えを英語で、相手に伝えることができる。	－聞くこと－ ① 物語文を聞き、そのあらすじとおもしろさを日本語で説明することができる。 ② 物語文の中で、命令文を使ったレジ係と武装犯人のやりとりを聞き、その場の雰囲気を理解できる。 ③ 過去完了の含まれる文を聞き、過去に起きたことを順序立てて理解できる。 ④ スキット作成過程でA L Tの指導助言を理解し応答できる。	① 命令文が、どのような場面でどのように使われているのか理解でき、適切な場面で使うことができる。 ② 物語文で、どのようにしたら「おち」を効果的に伝えることができるのかを理解できる。 ③ スキットを作成する過程で自分の考えていることを相手、(A L T)に伝え、英語で表現することができる。
	－書くこと－ ① 肯定・否定の命令文を含む簡単な文を書くことができる。 ② 過去完了を用いて、自分の経験や出来事を前後関係がわかるように書くことができる。 ③ 場面を設定し、簡単な英語で、スキットを作成することができる。	－読むこと－ ① 物語文の構成を理解し、あらすじをとらえてそれを日本語で説明することができる。 ② 物語文を読み、そこに埋め込まれた伏線と「おち」との関係に注意しながら読むことができる。 ③ 命令文が使われている文に注意し、臨場感のある音読ができる。	

		④ 過去完了の用法を理解した上で，出来事の前後関係を正確に理解ができる。	
--	--	--------------------------------------	--

5 学習計画（配当時間 5 時間）

時間	指導目標	学習活動	評価方法
1	Introduction Pre-reading task Reading section 1	■ listening ■ Check the new words and new phrases. ■ Grammar focus ■ Reading Comprehension	Check their worksheet and ask some questions about the lesson
2	Reading section 2	■ listening ■ Check the new words and new phrases. ■ Grammar focus ■ Reading Comprehension	Check their worksheet and ask some questions about the lesson
3	Task-based activities in groups Make a skit	■ Work in groups of three. ■ Students make a skit manuscript in Japanese. Act (role play) and work out the task in groups.	Check each group's composition
4	Task-based activities in groups Make a skit	■ Work in groups of three. ■ Students make a skit in English. Act (role playing) and work out the task in groups. Students ask ALT to help their skit	Check each group's skit
5	- Today's lesson - ☛ Presentation of skit	☐ Work in groups of three. ☐ Students play a role in their skit.	Evaluate each group's skit performance

6 本時の授業展開

Procedure	Learners' Activities	Instructor's Guidance	Skills	Remarks
Greeting & casual conversations (1min)	■ Greet Teacher ■ Listen to the teacher and answer the questions ■ Make a group of three (Skit group)	■ Greet students - Say a few words and ask some questions	L,S	Make a group of three (Skit group)
Introductions Presentation of today's class (2min)	■ Listen to the teacher ■ Prepare for their skit	■ Give the students Judging sheet ■ Tell the students skit definitions and presentation rules ■ Give some advise to the students about their skit performance	L,S	△ Judging sheets
Rehearsal (5min)	■ Students practice before their skit performance - Make sure of each role - Check the pronunciation of words and phrases	■ Encourage the students perform their skit without hesitation ■ Ask ALT to help the students	L,S,W,R	△ Skit manuscript To give Some advise if necessary
Presentation of skit (35min)	■ Perform their skit within 5min ■ Observe the other	■ Introduce judge ■ Observe the student's skit and	L,W,S	△ Judging sheets To give

	student's skit and evaluate it	evaluate it		Some advice if necessary
Consolidation (5min)	■ Listen to the teacher and respond appropriately ■ Share their feelings and thoughts with each other	■ Give the students some comments about their skit	L,W,S,	△ Judging sheets (Task2)
Closing (2min)	■ Students take notes	■ Give the students home assignment	L,W	△ Work sheets

1 Goal:

- (1) To promote students' communicative abilities through presentations of skit performance
- (2) To encourage the students speak and write in English their skit

2 Date: Nov 10th mon, 08

3 Skit definition and presentation rules:

- (1) Style and content: Free, but should be original.
- (2) A skit is by definition a short, usually comical, theatrical sketch.
- (3) Presentation time limit: within 5 minutes.
- (4) Skit Manuscript: should be used Imperative Sentence in their skit manuscript. should be memorized their skit with each role.
- (5) Evaluation: Content (5), Performance / Delivery (10), English (5)

7 事前アンケートについて

生徒の事前アンケート（受け持ちクラス82名対象）の結果を考察すると、学習者の理解度(図5)において、教科書の内容を読んで「理解する割合が半分」であるという生徒の割合が半数以上を占め、「読めない」・「理解できない」を含めると8割以上を占めている。教科書の難易度の妥当性は今回の主旨ではないのでふれないが、生徒自身が英語の教科書に持っている気持ちの閉塞感みたいなものが伺える。実際、授業の雰囲気や生徒の英語力からすると少し自嘲気味ところはあるが、自己理解は行われている。

リーディング活動の障害（図6）になっていることでは語彙不足・文法的知識不足の割合が半数以上を占める。教えていて感じることであるが、習熟度で上位クラスであるにもかかわらず、基礎的な英語の力が定着されていないのが現状である。

8 授業実践の考察

リーディングの授業を行う中で、上記の結果を考慮し、生徒の自発的な活動として、どのような取り組みが可能であろうかという事を考えた。本教材では、速読を意識した授業展開を行い、大意をとる練習を繰り返してきたが、文法訳読式の授業でフォローを入れなければならない。学習者にとって高次のタスクを与えても決して有益には働かないのではないかと考えた。出来るだけ学習者にとって無理のないタスクとなるよう考慮し、『命令文を使用した短いスキットを作成・発表させることで、4技能を効果的に使用し、生徒達の実践的コミュニケーション能力が育成される』という仮説のもと本授業実践を行った。

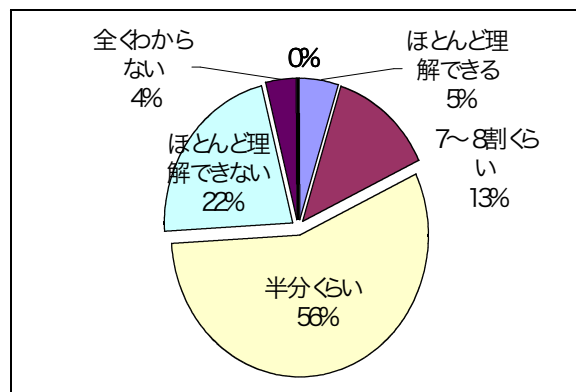


図5 英語の教科書を読んでどの程度理解出来るか

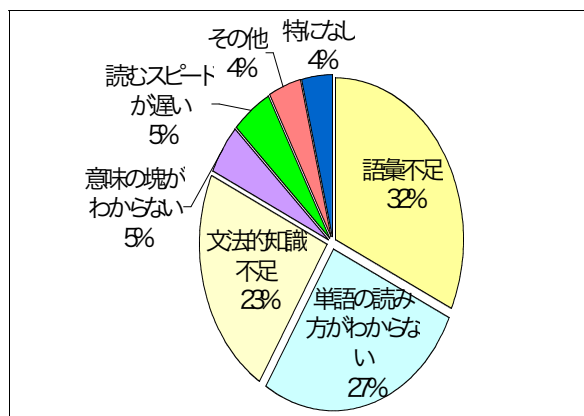


図6 リーディング活動の障害になっていること

本課の本文理解を終えた後、3人一組のグループを作り、グループでスキットを作成させた。本課の表現の一つである『命令文』を使用することとグループ全員が必ず役割を持ち英語で発話するという条件を与えた。原稿作成1時間、英文作成及びネイティブチェック1時間、発表1時間の計3時間を配し、時間内で終われない事に関しては宿題とした。普段の授業で行っている事と違う課題を与えた事による動揺みたいなものが少なからずある生徒もいたのだが、全体的には積極的に取り組む生徒が多く、主旨を説明すると楽しんで活動している様子が伺えた。何より英文を作成するということが生徒達には初めての経験となり、ALTに添削してもらい際にも積極的に自分たちの考えを伝えようとする姿勢がみられた。英語による発話や英作文をほとんど行っていない中で、生徒達が活動を通して自分の英語力を顧みて英語学習に対する動機付けには非常に効果があったと考える。

事後アンケートの結果では今回のスキット作成が楽しかったと回答（図7）しており、スキットを作成してついたと思う英語の力は何か（図8）との問いに、1つ以上を回答する生徒がほとんどであった。スキットを作成すると一番困ったことは何かとの問いには、ストーリー設定（おちを作る）や英作文など様々な意見がでてきた。（表8）これから分かるように生徒にとってスキット作成は4技能を使用する活動となり、その上、生徒自身もそれを認識できたものとする。

9 成果と課題

本検証授業の生徒のアンケート結果から考察すると、評価の観点である「生徒自身がスキットを作成する過程で自分の考えていることを相手に伝え、英語で表現することができる」・「与えられた課題を組み込んだスキットを楽しく表現し、発表する」・「自分の意見や考えを英語で相手に伝えることができる」など全ての観点で目標を達成できたのではないかと考える。生徒自身がスキットを作成する中でALTとの会話が成立したときの目の輝き、スキットを作成し、演じることで英語を楽しむという素朴な感動を生徒はもとより、私自身も感じた。作品の完成度や英語の表現については、確かに多くの課題が残るが、学習意欲をひきだす動機付けとなり、言語習得の大きな効果が期待できるのではないだろうか。

教材観・生徒観によって『体験・活用・参加型の学習』に違いがでる上、それに対応した工夫が必要であると切実に感じた。今回の仮説である『命令文を使用した短いスキットを作成・

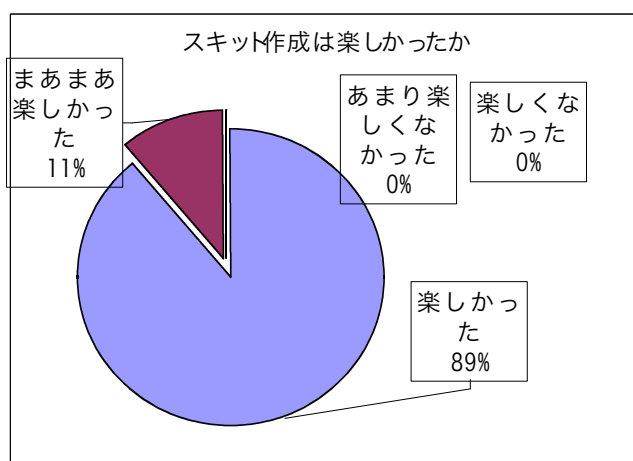


図7 スキットを作成してどうでしたか

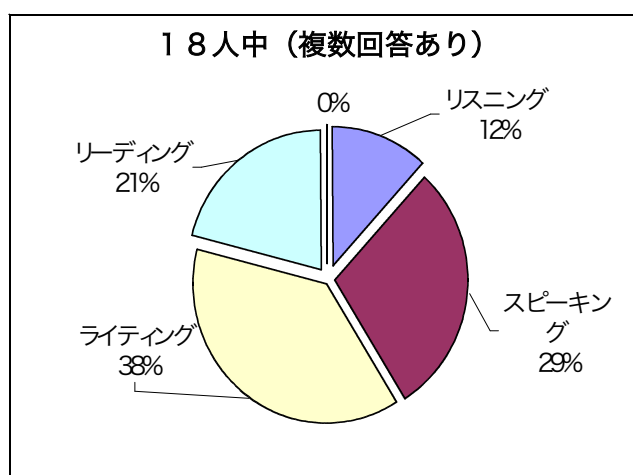


図8 スキット作成でついたと思う英語力

表8 生徒の感想

- ・話の落ちを作ることが難しい。わかりやすく伝えること。
- ・会話文の作成。
- ・話を作って英語にするのが大変だったけどトーニャに教えてもらって出来て良かった。
- ・みんながユニークなストーリーを作り、名演技をやって、とても楽しかったです。
- ・授業（スキット）は楽しくてやり方もいいと思う。
- ・自分たちで文章を考えるのは大変だった。でも自分で英語の文章を考えることは、英語の力がつくと思った。
- ・スキットの授業を受けたのは初めてだったので少し難しかったけど、楽しくできました。文を作るのが難しかったけど、教えてもらったりしてちゃんと仕上がったのが良かったです。

発表させることで、4技能を効果的に使用し、生徒達の実践的コミュニケーション能力が育成される』ことについての検証は不十分である。「動機付け」という本当に導入の部分で終わってしまった感が残る。リーディングという教科であることと、受験を控えた3年生の場合について「生徒の活動」に対しては消極的になってしまい、講義形式の授業中心に陥りがちである。『体験・活用・参加型』の学習をさらに研究し、いかにうまく教材に導入するかが、今後の研究課題となった。

実践事例2 …………… 高等学校の実践より 沖縄県立球陽高等学校教諭 平良 学

1 単元名：第2部 活動編

段階的スピーキング活動42（三省堂）

2 単元設定の理由

- (1) 教材観：生徒たちは中学校、高等学校とほぼ6年間ものあいだ英語の学習をしてきている。では、実際外国人を前にして英語を使い自分の意見を伝え、また、相手の意見を正しく聞きとることができるだろうか。本課では生徒達に、英語を話すこと、また聞くことに慣れさせ、基本的な会話から、お互いの意見を論理的に交換していくディベートにまで高めていこうというねらいを持っている。ある事柄について意見を述べる場合、相手を納得させる言い方、反対する言い方などを具体的・体験的に実施してとところまでもっていきたい。
- (2) 生徒観：球陽高校はほとんどの生徒が国公立大学進学を希望するいわゆる進学校である。今回授業を行った3年生のB選択の生徒17名は英語の実力という点ではレベル的に差がやや見られるものの、概して総合的な力のある生徒たちである。素直で明るい生徒が多く、コミュニケーション重視の活動にはとても積極的である。
- (3) 指導観：高等学校学習指導要領には外国語の目標として「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。」とある。
「自分の意見・考え・感想を言える」「会話を継続できる」「論理的に話ができる」「話題に関する質問やその応答ができる」「自分の持っている情報を第三者に伝えることができる」これらの力は実際に英語を運用していく上で必要不可欠な能力である。そして、これらを養っていくには単なるパターンプラクティスやドリル演習では不十分であろう。体験的な活動を通して、実際に理解しようとする態度、理解させようとする態度を持ってターゲットとなる言語を使用しなくてはならない。そういう点で、ディベートを最終目標と置く今回の指導計画は実践的コミュニケーション能力を育むに最良の方法である。

3 単元の目標

- (1) ディベートへの橋渡しタスクとしての“One Minute Chat”で、英語で会話をする態度を養う。
- (2) 二つ目のタスクとしての“Chain Talk”により、相手の意見を聞こうとする態度、また、自分の考えを相手に伝えようとする態度を育てる。
- (3) 自分の意見を述べる時、どのような表現を用いたらよいか、また、賛成したいときや違った意見を述べたいときにはどうしたらよいか学び、ディベートの基礎をつくることができる。
- (4) 上記(1)から(3)を基にディベートを行い、実践的コミュニケーション能力を高め、論理的思考を養うことができる。

4 キャリア教育の視点

本単元においては、キャリア教育で育成すべき4つの能力領域の中では、特に「人間関係形成能力」が特に関連していると考ええる。「自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力」とされている「自己の理解能力」、また、「多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力」とされる「コミュニケーション能力」両方の能力の育成につながるだろう。加えて、スキットを取り入れた学習においては、現実の場面を演じさせるということで「コミュ

ニケーション能力」の向上が期待される。

5 単元の評価規準

【関心・意欲・態度】	【表現の能力】	【理解の能力】	【知識・理解】
①相手の意見について関心を持ち，授業に積極的に参加しようとする。 ②与えられたトピックについて自らの意見を持ち，意見交換をしようとする。	①英語での基本的な会話技術を身につけている。 ②場面や話題に応じた英文を書いたり話したりすることができる。 ③「賛成・反対する」表現の働きについて理解し対話することができる。	①相手の発言を聞き取り，理解することができる。 ②相手の意見に対する適切な質問をすることができる。	①「賛成や反対の意思を表す」に用いられる語句や文法を理解している。 ②その他学習したディベートで使える表現などを使い活用できる。 ③場面や状況，目的に応じた表現を知っている。

6 授業における単元の指導と評価の計画

時間	学 習 活 動	学 習 目 標	評価規準				評 価 資 料
			関	表	理	知	
1	・ディベートについての紹介 ・日本語によるディベート	・ディベートにについて知る ・グループをつくり，ワークシートに従って日本語でディベートを行える	①				行動観察 発表
2	・ブレインストーミングをしてディベートの準備をする ・ディベートで使える表現を学習する	・ワークシートを利用したブレインストーミングができる ・ディベートでよく用いられる表現を知る				①	行動観察 ワークシート
3	・実際のディベートに向けていくつかのタスクを行う ①ワンミニットチャット ②チェントーク	・英語で，あるテーマに従って自分の言いたいことを表現できるようにする ・ディベートに必要な「相手の意見を注意して聞く」という力と「理由を簡潔に答える」という力をつける		①			行動観察 ワークシート テスト
4	・前回①②2つのタスクを実施。 ・ワークシートを利用しディベートに向けての準備	・英語で，あるテーマに従って自分の言いたいことを表現できるようにする ・ディベートに必要な「相手の意見を注意して聞く」という力と「理由を簡潔に答える」という力をつける ・次回のディベート活動	②	②			行動観察 ワークシート

		に向けグループで発言内容や質疑応答を考える					
5	・ 前回同様①② 2つのタスクを実施 ・ ディベート活動	・ 英語で、あるテーマに従って自分の言いたいことを表現できるようにする ・ ディベートに必要な「相手の意見を注意して聞く」という力と「理由を簡潔に答える」という力をつける ・ ディベート活動を通して、自分の立場で意見や理由を述べる方法を身につけ、ディベートで用いる表現になれるとともに、対立する二者(肯定・否定)の立場にもとづく意見の述べ方を身につける。			① ②	② ③	行動観察 ワーク シート テスト
本 時							

7 本時の学習指導

(1) 本時の単元名

第2部 活動編 段階的スピーキング活動42 (三省堂)

(2) 本時の指導目標

- ① ディベートへの橋渡しとして行う”One Minute Chat”で、英語で会話をする態度を養う。
- ② 2つ目の活動として”Chain Talk”を行い、相手の意見を聞こうとする態度、また、自分の考えを相手に伝えようとする態度を育てる。
- ③ 自分の意見を述べる時、どのような表現を用いたらよいか、また、賛成したいときや違った意見を述べたいときにはどうしたらよいか学び、ディベートの基礎をつくることができる。
- ④ 上記(1)から(3)を基にディベートを行い、実践的コミュニケーション能力を高め、論理的思考を養うことができる。

(3) 授業の仮説

生徒が学習を進める過程において、相手の意見を注意して聞き、自分の意見をまとめ発表するディベート等の体験的タスクを通し、実践的コミュニケーション能力(自己を表現し、また他者の意見を理解しようとする態度)を伸ばすことができるだろう。

(4) 言語材料

Oh, did you? / No kidding. / What else did you do? / You said that ~. / I think [believe, feel] ~. / I agree[disagree] with ~. / S said that ~. / I have a different opinion. / I don't think so. 等

8 本時の具体的な評価規準

学 習 活 動	具体的な評価規準 (評価の観点)	評価基準			評価材料
		A	B	C (支援)	
ワークシートを使い、ペアー	英語での基本的な会話技術を身につけている。 (関心・意欲・態度)	相手の話を正確に理解し、自分の言いたいことも正しく表現で	相手の話に耳を傾けて、積極的に自分の言いたいことを伝えよ	自分の考えを日本語で表現させ、英語で必要な単語や文型を	行動観察

で 会 話 練 習 を す る。 グ ル ー プ に 分 か れ , ワ ー ク シ ー ト に よ る 会 話 練 習 を す る。	(表現の能力) 【 One Minute Chat 】	きている。	うとしている。	確認させる。	
	相手の意見を聞き、 それに対して自分 の意見を述べる方 法を身につける。 (表現の能力) 【 Chain Talk 】	前の順番の生徒 が述べた意見を しっかりと聞き 取り繰り返すこ とができ、自分 の意見もしっか りと述べること ができている。	前の順番の生徒 の述べた意見を 概して聞き取る ことができ、自 分の意見もある 程度伝えること ができている。	聞き取れなかつ た部分を繰り返 させる。自分の 考えを日本語で 表現させ、英訳 に必要な単語や 文型を確認させ る。	行 動 観 察 発 表
グ ル ー プ に 分 か れ , デ ィ ベ ー ト 活 動 を す る。(自 己 評 価 ・ 生 徒 間 評 価 を含む)	自分の立場で意見 や理由を述べる方 法を身につける。 また、ディベート で用いる表現にな れるとともに、対 立する二者(肯定・ 否定)の立場にもと づく意見の述べ方 を身につける。 【 Mini Debate 】	グループ内で協 力しディベート 活動を行える。 相手の発言(意 見)を理解し、 自分たちの意見 もししっかりと述 べることができる。 相手に適当 な質問をするこ とができ、また、 相手からの質問 にも積極的に答 えられる。	グループ内で協 力しディベート 活動を行える。 相手の発言(意 見)をだいたい 理解し、自分た ちの意見も述べ ることができる。 相手にも質 問することがで き、相手からの 質問にもある程 度答えられる。	発言したい文章 を英語にするた めにヒントとな る単語や文型を 確認させる。聞 き取れていなか った部分は他の 表現で述べさせ たり、教師が繰 り返したりす る。質問もまた それに対する応 答も同じような 支援を行う。	行 動 観 察 発 表

9 本時の指導過程

Procedure	Instructor's Activities	Students' Activities	Remarks
Greeting & Introduc- tion(1min)	Greet students Announce today's schedule briefly	Greet the instructor	Whole Attendance
Warm-up (3min)	Guess Game: Give a pop quiz writing an English word on the board	Guess Game: Make pairs and enjoy the game One student in a pair faces the board and explains what the word it is on the board in English, while the other guesses what it is.	Pairs
Task 1 (3min)	One minute chat: Make the students find their partners Give them the worksheets Listen to the conversations among the students and give them some help if needed	One minute chat: Find a partner and enjoy chatting Use the worksheet (which includes self evaluation part)	Pairs Worksheet
Task 2 (3min)	Chain Talk: Divide the students into 6 groups; each group has 3 members. Give them the worksheets Listen to them talking with the worksheet	Chain Talk: Make groups of 3 (which are going to be debate teams) Talk with the members using the	Group Worksheet

		worksheet	
Task 3 (45min)	Mini Debate: Make the students arrange the desks for a debate Hand them the worksheets and give them 5 minutes to prepare for a debate Give them some help if needed Make sure they are ready for the debate. Make them begin the debate	Mini Debate: Arrange the desks for a debate. Prepare for the debate using the worksheet Begin the debate	Groups Worksheet Presentation
Self Evaluation (3min)	Give the students the evaluation sheet to fill in	Evaluate themselves using the evaluation sheet	Worksheet
Consolidation (1min)	Give the results of debate competition again Make a few comments about the debate	Listen to the instructor	Whole
Closing (1min)	Discuss the next class	Listen to the instructor	Whole

※ Procedure will be changed according to the time spent in each activity.

10 授業実践の考察

本授業実践は、「生徒が学習を進める過程において、相手の意見を注意して聞き、自分の意見をまとめ発表するディベート等の体験的タスクを通し、実践的コミュニケーション能力（自己を表現し、また他者の意見を理解しようとする態度）を伸ばすことができるだろう。」という仮説のもと行なった。生徒に対して実施したアンケート結果を踏まえ考察していく。アンケートは2回行い、まず事前アンケートとして検証授業2カ月ほど前の9月11日に授業内で実施した。そして11月6日、事後アンケートを検証授業が終わったその次の授業内で行った。

(1) 生徒の感想からみえてくるもの

表9は「ディベート学習でよかったと思うことは何ですか」という質問への回答である。「楽しく活動できた」という旨の答えがいくつか見られ、生徒たちが積極的に取り組めた様子がうかがえる。結果ではあるが、注目したいのは「英語をしゃべる機会を与えてくれた」や「自分の思っていることを相手に伝えようと頑張れた」という回答である。これらはまさにこの一連の学習計画における大きな目的である「実際に英語を使用させコミュニケーションを体験させる」への結果である。と考える。生徒たちには指導者中心ではない生徒中心の学習スタイルは新鮮だったかもしれない。やはり、学習した言語材料を実際に使ってみたいという彼らの欲求を満たす場を与える必要がある

だろう。今回のディベート等のインタラクティブな活動は、生徒たちのそういう「コミュニケーションをとりたい」という部分の「実戦的コミュニケーション能力を高める良い活動であっただろう。

表10は逆に「ディベート学習でだめだったと思うことは何ですか」という質問への回答である。3年生であったというこ

表9 アンケート結果1

- ・自分の意見をいえるようになった。
- ・日常会話はできるようになった。
- ・みんなと一つになれた。
- ・笑えたのがよかった。
- ・少し話せるようになった。
- ・時間があつという間に過ぎるくらい楽しかった。
- ・みんなでやるのは楽しかった。
- ・自分の思っていることを相手に伝えようと頑張れた。
- ・英語をしゃべる機会を与えてくれた。
- ・リスニングに注意して聞けるようになったこと。
- ・楽しく英語に触れあえた。
- ・スピーキングに少し自信がついた。恥じらいをなくせた。
- ・時間に制限があるので、伝えたいことを速く頭の中で組み立てる力がついてよかった。
- ・どうにか英文を作ろうと努力ができる。

表10 アンケート結果2

- ・負けたら落ち込む。
- ・考えすぎて何も発言せず自分たちの持ち時間を使ってしまった。
- ・協力が足りなかった。
- ・受験前には・・・。
- ・文を作れなくて答えられなかったこと。
- ・少し文法にとらわれそうになったこと。
- ・たまにぐだぐだだった。
- ・文にできなかった。
- ・自分発言が少なかった。
- ・受験に必要ななかった。
- ・言いたいことが英語ですぐに思いつかなかったりした。

とで「受験に必要なかった」や「受験前には・・・×」という答えが返ってきている。

もっとセンター試験等の受験に直結したいいわゆる「受験英語」をやりたいという声も聞こえてはいた。今授業実践を実施したクラスは選択の授業であり、オールイングリッシュのコミュニケーション型な授業になると始めから伝えていたが、それでもやはり2学期になると心配になるのだろう。実戦的コミュニケーションを育むには現実には迫ってくる「受験」というシステムが大きな壁になっていると実感させられた。

(2) 4技能に関連した「実戦的コミュニケーション能力」について

「特に伸ばしたい英語の力は何ですか」(図9)

という問いには、事前で「単語・文法の知識」や「リーディング」といったどちらかという「受験」に関連した力を伸ばしたいと考えている生徒が多かったが、事後には、「スピーキング」を伸ばしたいとする生徒が増えた。これは、ディベートを始めとする様々な体験的学習をさせることで、英語は自分を理解してもらい他人を理解する手段であり、実際にそれを使いコミュニケーションできることの大切気付いた結果だと考える。続く「英語で話すことは楽しいですか」(図10)という質問に「楽しい」と答えた生徒が増えていることもそれに関連した結果であろう。

以上からスピーキングへの関心と意欲が高まっている生徒が増えているのが分かるが、では実際「どの程度英語を話せる」と感じているのか図3がその回答である。「三つ以上の単語をつなぎ合わせながら、何とか自分の思っていることを伝えることができる。日常会話であれば、思っていることの半分以上は伝えることができる。」又は「多少、語順や文法的な間違いはあるが、文の形で自分の思っていることを伝えることができる。日常会話であれば、思っていることの半分以上は伝えることができる。」と答えた生徒が事前アンケートにおいては8名だったのが、事後には13名に増えている。これほどの短期間で急激に英語作文の能力が伸びていることはないと考え、これまでその力はあるながら間違えることへの恐れや英語を話すこと自体への恥ずかしさから積極的な発話につながらなかったのが、今授業実践を通して「自分を表現する」という面での「実践的コミュニケーション能力」が高まりこの結果につながっているのだろう。

(3) 情意面に関連した「実戦的コミュニケーション能力」について

「好きな活動はどれですか」(図12)という質問で、事前に行ったアンケートでは「ゲーム」が多かった。しかし、事後のアンケートでは「ディベート」や「スキット」など実際に英語をコミュニケーションの手段として使う活動が好きと答えた生徒が増えた。ビンゴなどのゲ

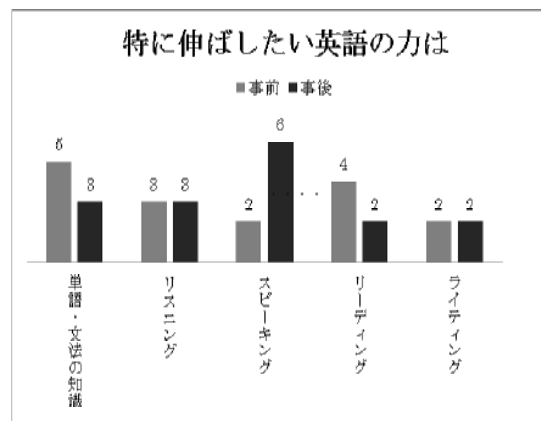


図9 アンケート結果3

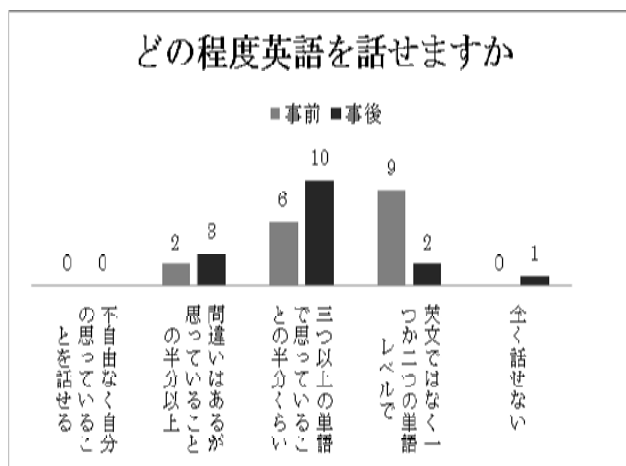


図10 アンケート結果4

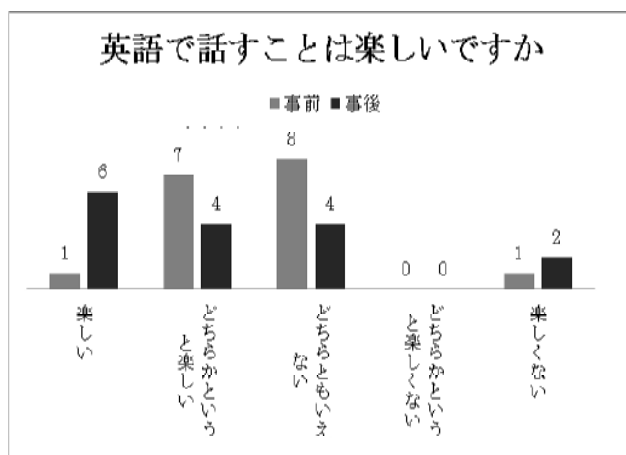


図11 アンケート結果5

ームのように使用する言葉が限られ、相手とのインタラクティブもあまりない活動に対し、これらの活動はより高度な知的作業と豊富な言語知識を必要とする。つまり、「チャレンジング」な活動である。前述の特に伸ばしたい英語の力がスピーキングとあげた生徒が増えているのに関係があるだろう。本実践授業を通しコミュニケーションの大切さを実感することができ、積極的に自らのコミュニケーション力を試してみたいという積極的な姿勢が出来上がってきていることの表れである。

また、「ディベート学習を通じて英語運用能力以外のこういった力がついたと思いますか」(図13)という問いにおいては、「相手の言いたいことを推測する」や「コミュニケーション能力」「洞察力」などをあげている生徒が多く、「受験英語」ではない実際に現実世界で使われる「実戦的な英語」を使用するときに役立つ能力を身につけることができた実感していることがわかる。もちろん、「実戦的コミュニケーション能力」とはこれらの力そのものであり、本授業実践の仮説「生徒が学習を進める過程において、相手の意見を注意して聞き、自分の意見をまとめ発表するディベート等の体験的タスクを通し、実践的コミュニケーション能力を伸ばすことができるだろう。」を実証する成果の一つになるであろうと考える。

「英語でのディベート学習は英語の力をつけるのに効果的だと思いますか」(図14)という質問においては、12名が肯定的な意見を持っていた。しかし、4名はディベートが効果的ではないと答えている。大半が「効果的である」と答えているが、個人によってこういったものを「英語の力」と捉えているかが異なっているとも考えられ、アンケートの質問の仕方に課題が残ったともいえる。

同じように次の質問「またディベート学習をやりたいと思いますか」(図15)においても、「やってみたい」「どちらかというをやってみたい」が12名いる一方、「やりたくない」が4名という結果となった。前述にもあるが、受験前であったということもあり、楽しんで活動していても受験が近づいているため授業は受験対策中心で進めて欲しいという声も聞こえ、そのことも影響しているかもしれない。

11 成果と課題

ディベート学習を始めとする様々な体験的学習を通して、実践的コミュニケーション能力を高めるというのが本授業実践のテーマであった。本授業実践において生徒たちは、教科書に

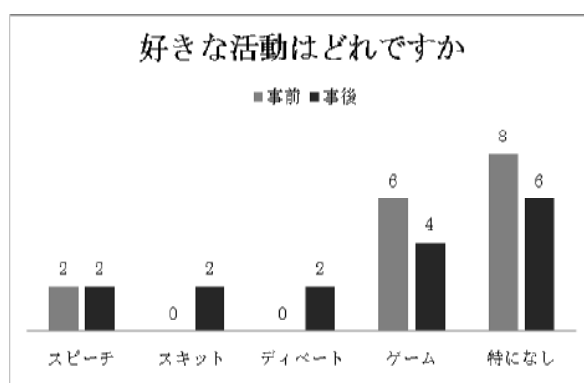


図12 アンケート結果6

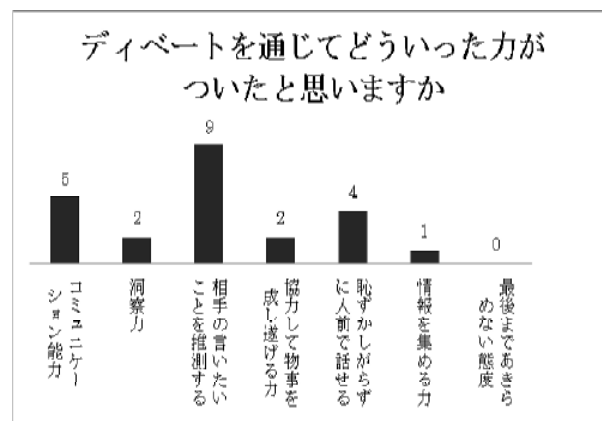


図13 アンケート結果7

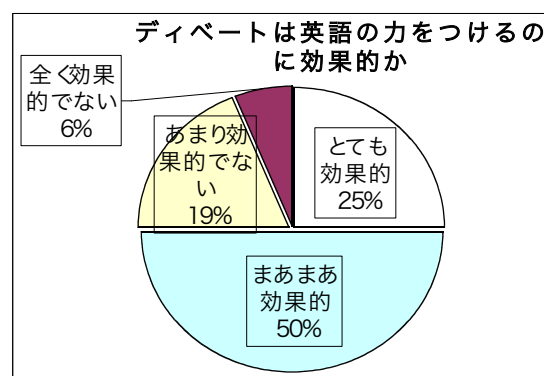


図14 アンケート結果8

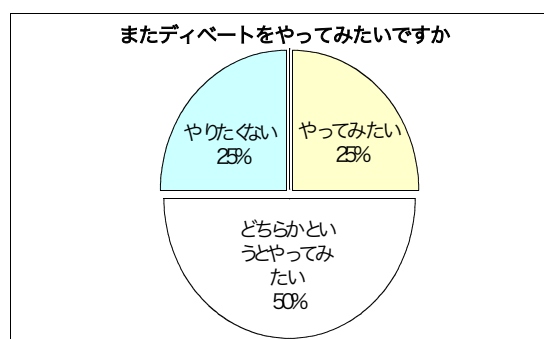


図15 アンケート結果9

載っている本文を音読練習したり、英語構文を暗記して言ってみるなどという単純なスピーキング活動ではなく、現実に関わり合いながら自然な会話をしたり、チームで協力して勝利を目指すというゲーム性も伴った討論学習であるディベート活動を行った。考察でも述べたように、これら活動を通して生徒たちの実践的なコミュニケーション能力は高まっただろうと考える。「自分の意見・考え・感想を言える」「会話を継続できる」「論理的に話ができる」「話題に関する質問やその応答ができる」「自分の持っている情報を第三者に伝えることができる」という実際に英語を使用してコミュニケーションを図っていく上で必要とされる力を実践を通して養うことができたのである。

課題は多く残る。中でも、こういったコミュニケーション的な学習形態といわれる「受験英語」指導を、どうやってうまく折り合いをつけるかというのは大きな問題であろう。語彙や文法事項等のインプットは豊富に与えられ、リーディングを中心とした問題には答えることのできる生徒が、スピーキングのアウトプットの場がなく、現実世界で英語話者と理解しあうために必要な実践的コミュニケーションを伸ばすことができていないのではないだろうか。二つ目の大きな課題は評価である。生徒間評価用にワークシートとして自己評価表と審査員による他者評価表を用意したが、評価項目や評価段階の工夫、教師用の評価表作成などさらに改善の余地があり研究を進めていきたいと考えている。また、この学習法は年間を通して各単元のまとめとして継続的に行うとさらに良い結果が期待できると考えている。年間計画や単元計画へ取り入れ方の工夫、さらにALTとのチームティーチングによる指導も効果的と思われるので、それらの研究も課題として研究していきたい。

IV まとめと今後の課題

本研究では、「英語による実践的コミュニケーション能力を高める指導の工夫——体験・活用・参加型のタスク活動を取り入れて——」をテーマに、スキットとディベートをとおして英語による実践的コミュニケーション能力の育成を目指して取り組んできた。その成果と課題をまとめる。

1 成果

- ・スキットとディベートというタスク活動をとおして、多くの生徒が授業に参加し、習得した言語材料を活用した言語体験に取り組むことができた。特に、これらの学習法は年間を通して各単元のまとめとして継続的に行うとさらに良い結果が期待できると考える。
- ・スキットやディベートの準備段階、あるいは実施段階で、既習の知識を生かしながら実際に目の前にいる相手と英語で会話をし、つまり言葉の意味・内容の交渉を行うことにより、文法能力という言語知識のみではなく、社会言語能力や談話能力、方略的能力といった言語運用力を包括する実践的コミュニケーション能力を育成することができたと考える。
- ・グループ、あるいはペアで協力しながら自作・自演のスキットやゲーム性のある討論学習でもあるディベート等のタスク活動を行うことにより、学習意欲をひきだす動機付けとなった。

2 課題

- ・教科書をとおして習得した言語知識や4領域の技能を活用し、実際の言語使用場面を考慮した活動を授業に取り入れていく工夫が必要である。
- ・教材観・生徒観によって「体験・活用・参加型の学習」に違いがでる上、それに対応した工夫が必要である。
- ・コミュニケーション的な学習形態といわれる「受験英語」指導の折り合いをうまくつけるための工夫が必要である。特に、年間計画や単元計画への取り入れ方の工夫、さらにALTとのチームティーチングによる指導も効果的と思われる。それらの研究が今後の課題として残る。

〈主な参考文献〉

- 青谷正妥 2005『英語の勉強力』 P H P
大和隆介 2004『英語教育』「導入期の指導：ストラテジーは使いながら身につけさせよう」大修館
長瀬荘一 1996「英語授業改革双書 N00.8『コミュニケーション能力を育てる英語の授業改造』」
明治図書